宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第２０３集

あとえさかのした
跡江坂ノ下遺跡

主要地方道宮崎西環状線（松橋工区）地域活力基盤創造交付金事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１１

宮崎県埋蔵文化財センター

序

本書は、主要地方道宮崎西環状線（松橋工区）地域活力基盤創造交付金事業に伴い平成２１年度に実施した跡江坂ノ下遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する宮崎市西郊の跡江地区は、国指定史跡の生目古墳群や跡江貝塚などの史跡が分布しており、古くより人々の営みがあった場所として知られています。

今回の発掘調査は大きな規模のものではありませんが、古墳時代から近世に至る土器や陶磁器、近世の墓や溝などの遺構・遺物が確認されており、宮崎平野の地域史を解明する上で重要な意味をもつと考えております。

本書に盛り込まれた資料が学術資料としてのみならず、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導･御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成２３年　３月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　森　隆茂

例言・凡例

1　本書は主要地方道宮崎西環状線（松橋工区）地域活力基盤創造交付金事業に伴い、宮崎県教育委員会が実施した宮崎市大字跡江所在の跡江坂ノ下遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、宮崎県県土整備部宮崎土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は平成２２年２月２２日から３月２３日まで行った。

3　現地調査における実測･写真撮影などの記録作成は福田泰典、中田憲治（調査第二課）が行った。

4　整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面作成・実測・トレースは吉本正典（調査第二課）が整理作業員の協力を得て行った。遺物実測について宗廣睦子、太田真理子（調査第二課）の補助を得た。

5　本書の第１図は、国土地理院発行の５万分の１地形図（「宮崎」）をもとに作成した。

6　本書で使用した土色及び遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に準じた。

7　本書で使用した方位は国土座標Ⅱ系（世界測地系）の座標北、標高については海抜絶対高で示してある。

8　本書で使用した遺構記号は以下のとおりである。各遺構番号については通し番号を付した。墓制としての呼称は「土坑墓」、その地下構造のみを指す場合は「墓壙」とした。

　ＳＣ・・土坑　ＳＤ・・土坑墓　　ＳＥ・・溝状遺構

9　本書の執筆は福田泰典、吉本正典が行い、編集は吉本が行った。

10　挿図のうち、遺物の縮小率は原図の 67％、50％、33％、25％であり、図中に２／３、１／２、１／３、１／４と表記している。

11　出土遺物・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに …… 1

第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の経過と組織 …… 1
第３節　遺跡周辺の環境 …… 2

第Ⅱ章　調査の記録 …… 4

第１節　調査の概要 …… 4
第２節　遺構と遺物 …… 4
（１）遺構の分布 …… 4
（２）土坑墓 …… 4
（３）土　坑 …… 7
（４）溝状遺構 …… 8
（５）遺構外出土遺物 …… 9

第Ⅲ章　総　括 …… 13

図　版

報告書抄録

挿図目次

第１図　遺跡の位置 …… 2
第２図　調査区周辺の地形 …… 4
第３図　遺構の分布 …… 5
第４図　１号土坑墓・１号土坑墓出土遺物 …… 6
第５図　２号土坑墓・２号土坑墓出土遺物 …… 6
第６図　３号土坑墓 …… 7
第７図　１号土坑・１号土坑出土遺物 …… 8
第８図　２号土坑 …… 8
第９図　３号土坑・１号溝状遺構 …… 9
第 10 図　１号溝状遺構出土遺物 …… 10
第 11 図　遺構外出土遺物① …… 10
第 12 図　遺構外出土遺物② …… 11

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

主要地方道宮崎西環状線（松橋工区）は、宮崎市浮田地区から跡江地区を通り、大淀川に架橋予定の新相生橋までの区間の県道の改良工事を行うものであり、宮崎県の県土整備部宮崎工事事務所が事業主体となって実施している。

同区間の事業における文化財保護の協議は、平成19年度に宮崎県文化財課からの照会と回答に基づき始まった。計画は周知の埋蔵文化財包蔵地である跡江遺跡、堂原遺跡、大屋敷遺跡等に隣接する土地を通過するものであったことから、県文化財課では平成２１年８月１１日～１３日に、跡江地区の微高地部分を対象とする確認調査を実施した。

確認調査の結果、近世の土坑墓が検出され、近世を中心とする陶磁器類が出土することが判明した。このため、協議を進めた結果、当遺跡のうち工事により影響を受ける範囲について、事前に埋蔵文化財の発掘調査を行い、記録保存の措置を講じることとなった。

以上の協議の結果、平成２１年３月５日付けで文化財保護法第９４条に基づく通知が県土整備部宮崎工事事務所長より提出され、平成２１年３月１８日付けで宮崎県教育委員会教育長が発掘調査実施を要する旨の回答を行っている。

第２節　調査の経過と組織

発掘調査は宮崎県教育委員会が主体となり、県埋蔵文化財センターが実施した。事業調整は県文化財課があたった。調査は平成２２年２月２２日に着手し、同年３月２３日まで実施した。

発掘調査から整理作業・報告書刊行に至る県埋蔵文化財センターの体制は下記のとおりである。

平成２１年度　発掘調査

所　長	福永　展幸
副所長	長友　英詞
調査第二課長	石川　悦雄
調査第三担当リーダー・副主幹	福田　泰典
同上・主査	中田　憲治

平成２２年度　整理作業・報告書作成

所　長	森　　隆茂
副所長	北郷　泰道
総務課長	矢野　雅紀
調査第二課長	永友　良典
調査第三担当リーダー・副主幹	吉本　正典

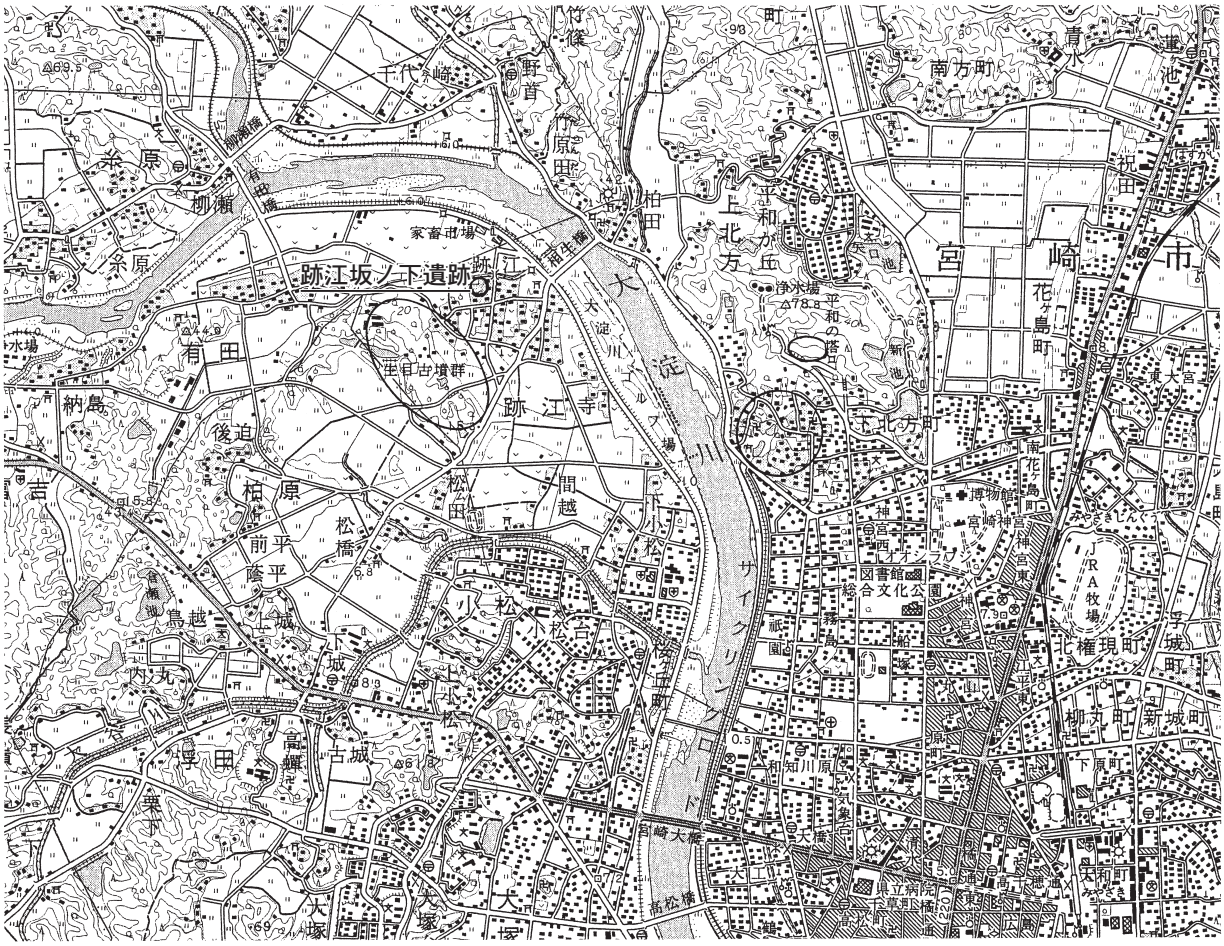
第３節　遺跡周辺の環境

跡江坂ノ下遺跡は、宮崎市大字跡江 706 番付近に所在する［第１図］。遺跡名の「坂ノ下」は調査地付近の地名で、バス停名や北西にある橋にこの地名が付されている。

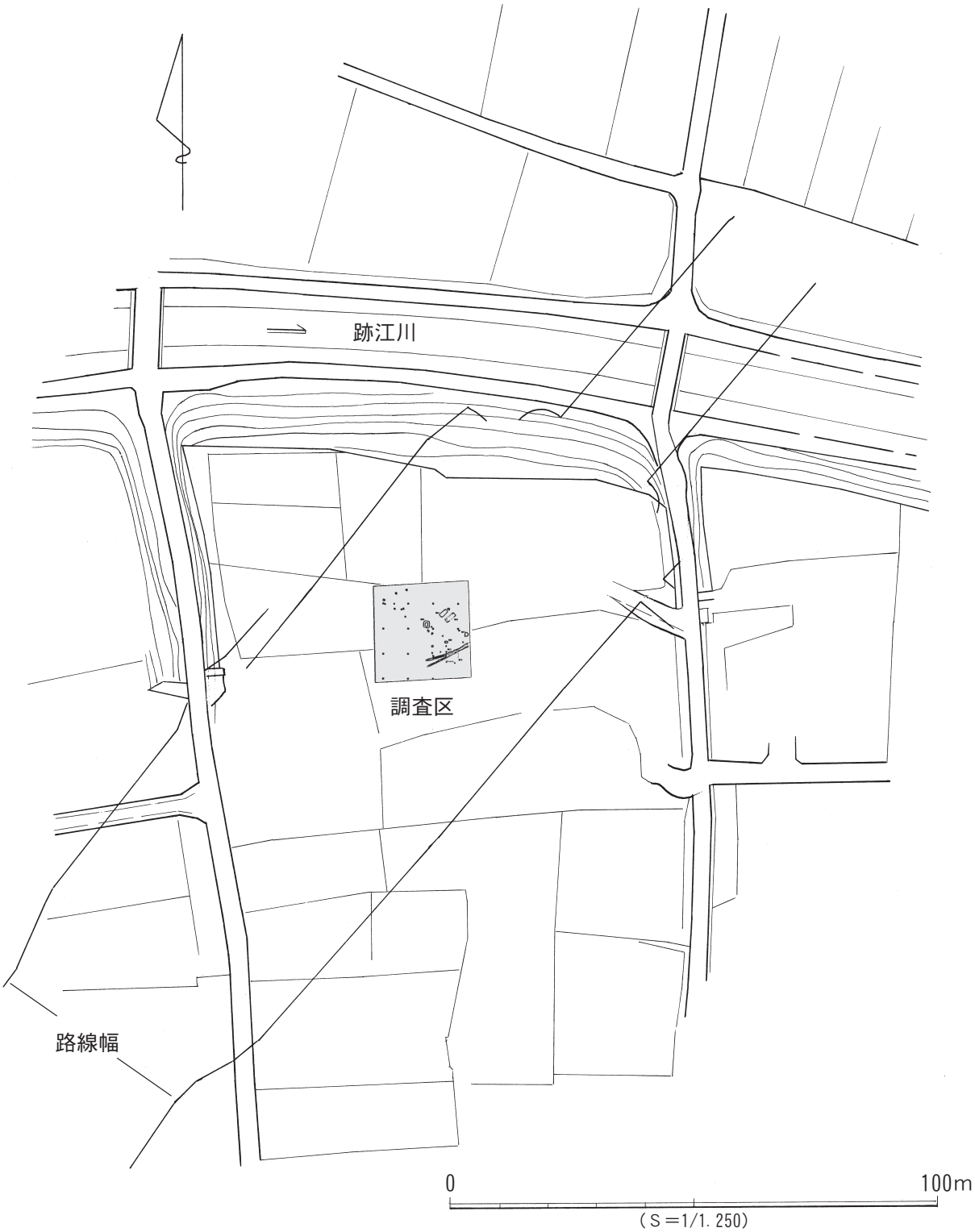
遺跡は大淀川が宮崎市街に入る手前で大きく蛇行する地点の右岸にあり、東へ流れる大淀川支流の小河川（跡江川）のすぐ南にある低段丘の北縁辺部に立地する。標高は海抜絶対高で 11 m前後である。周辺は現在、宅地と水田などの農地となっている。

付近の遺跡としては、遺跡南西の丘陵上に分布する国指定史跡・生目古墳群が知られている。また丘陵端部には縄文時代早期の跡江貝塚がある。大淀川の対岸には下北方古墳群や、やはり縄文時代早期の柏田貝塚などが所在する。

本遺跡の主たる時期である中世～近世に関しては、宮崎平野における考古学的情報は決して多くはない。近年、別府町遺跡、旭２丁目遺跡といった市街地における施設建設に伴う発掘調査により、宮崎市街の形成に先立つ遺構群の存在が知られるようになったこと、西部の台地・丘陵上に立地する上の原第２遺跡で近世村落の建物跡群が確認されたことや龍泉寺遺跡で墓地が確認されたことなど、中世から近世にかけての時期における集落の在り方がおぼろげながら知られるようになってきた。



第１図　遺跡の位置



第２図　調査地周辺の地形

第Ⅱ章　調査の記録

第１節　調査の概要

今回の事業に係る調査対象面積は５００㎡であったが､当初の予測より攪乱等の地形改変が激しく、遺構の検出が可能であった３８０㎡の範囲について実掘を行った。調査期間は平成２２年２月２２日から平成２２年３月２３日までの約１か月間であった。基本的に測量・実測や遺構精査・検出、遺構掘り下げ等の現地作業は、当センターの担当職員が行った。

現地調査においては、重機による表土除去後、人力にて表土、攪乱土を剥ぎ、黄褐色・灰黄色を呈する砂質の河成堆積物層の上面で遺構の精査を行った。その結果、近世の土坑墓・溝状遺構等を検出した。遺物は遺構埋土中に加え、表土中より若干量が出土している。大半は近世の陶磁器であるが、少量ではあるが古墳時代・中世（14 ～ 16 世紀代）の土師器や陶磁器等も含まれており、遺跡周辺に該期の集落等が存在していた可能性が指摘できる。

遺構完掘後、実測と写真撮影を行い、現地での作業を終了した。

第２節　遺構と遺物

（１）遺構の分布

調査区内における分布は第３図に示すとおりである。ほとんどが近世に構築されたものと考えられるが、切り合い関係もみられることから、遺構間の時期差が存在するものと考えられる。
なお、文中の遺構規模の値は完掘時の測定値、深さは検出面からの値である。

（２）土坑墓

近世の墓壙が３基確認されている。うち１基は確認調査時に検出されたものである。いずれも埋土中には基盤層由来のブロックや微細粒を含んでいる。

１号土坑墓（ＳＤ１）［第４図］

墓壙は長軸 2.04 ｍ × 短軸 1.0 ｍ。深さは 10 ㎝程度であり、残存状況は良くない。これは後世の耕作等により削平を受けたためであろう。主軸方位はＮ－ 48°－Ｅである。平面形状から寝棺であると推定される。北東側に隣接して小穴が検出されているが性格等は不明である。

副葬品には銭貨（２）があり、７枚が銹着した状態で出土した。銭種は不明である。その他、棺材の破片（３）も出土している。東播系の須恵器鉢（１）は埋土中に混入したものであろう。

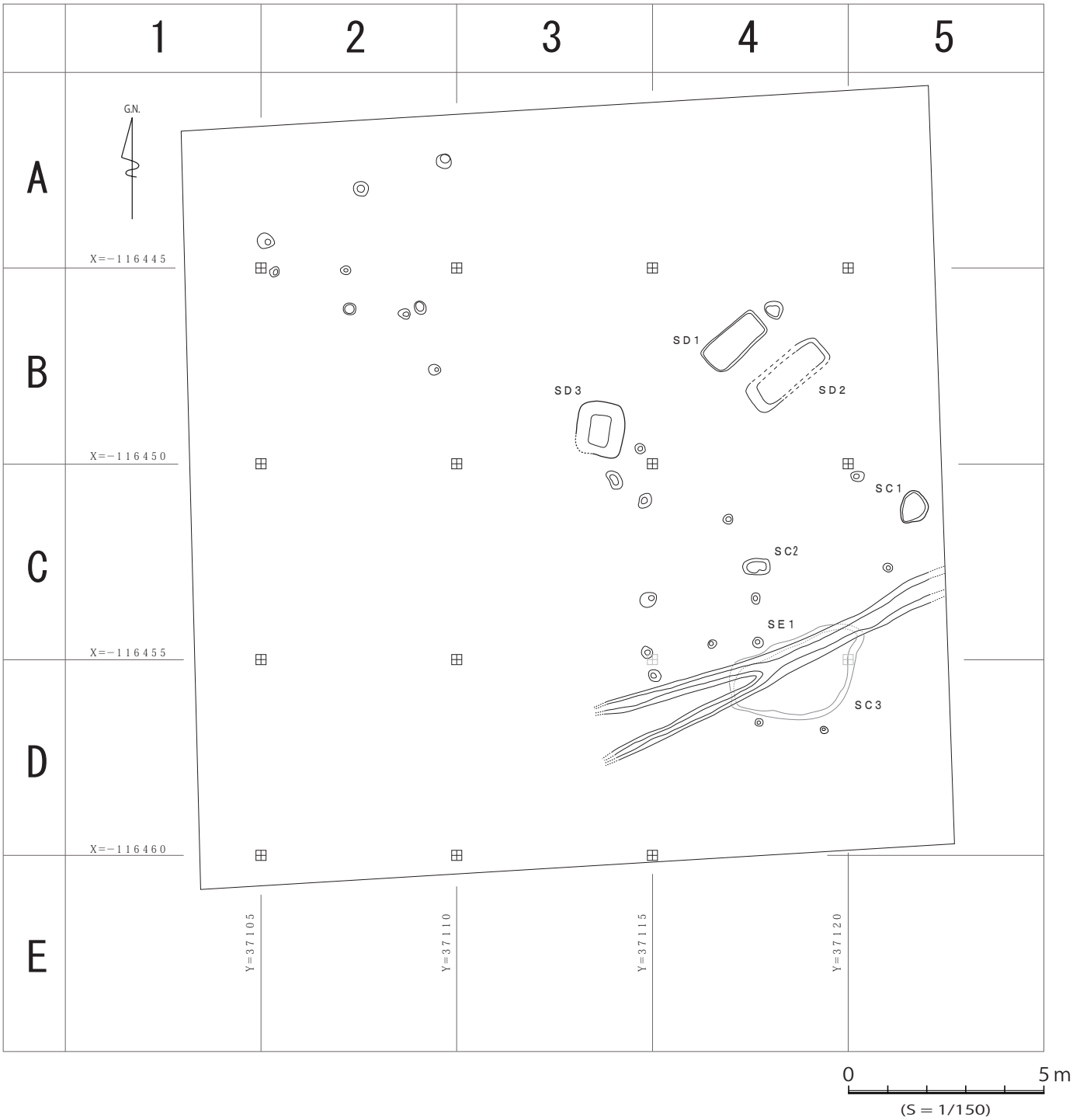
２号土坑墓（ＳＤ２）［第５図］

長軸 約 2.35 ｍ × 短軸 約 0.90 ｍ、深さは 約 50 ㎝。主軸方位 はＮ－ 50°－Ｅで、ＳＤ１と主軸がほぼ揃う。平面形状から寝棺と考えられる。中央部付近は近～現代の攪乱坑が床面以下の深さまで掘り込まれている。

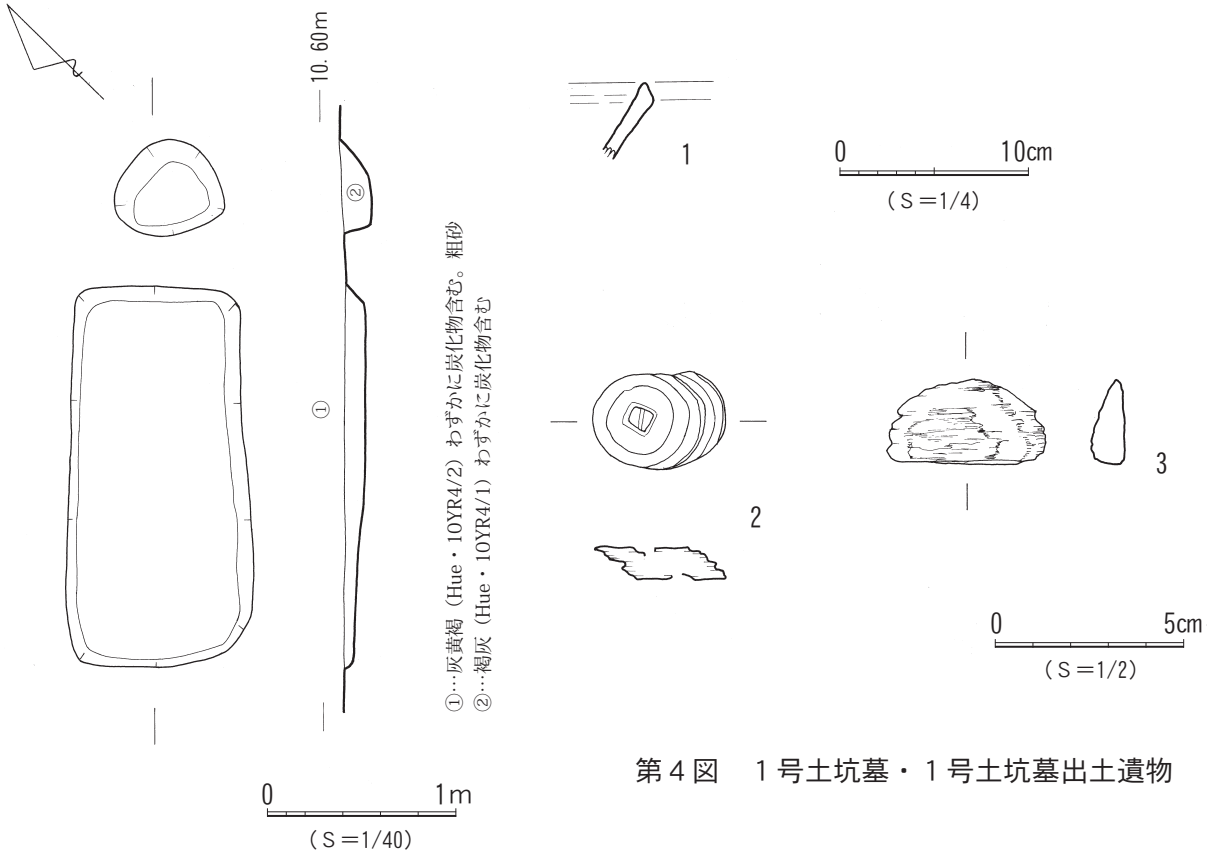
遺物は比較的大きな陶器の破片が出土しているが、副葬された遺物かどうかは不明である。４は薩摩系の陶器甕。５と６は備前系擂鉢の口縁部である。

３号土坑墓（ＳＤ３）［第６図］

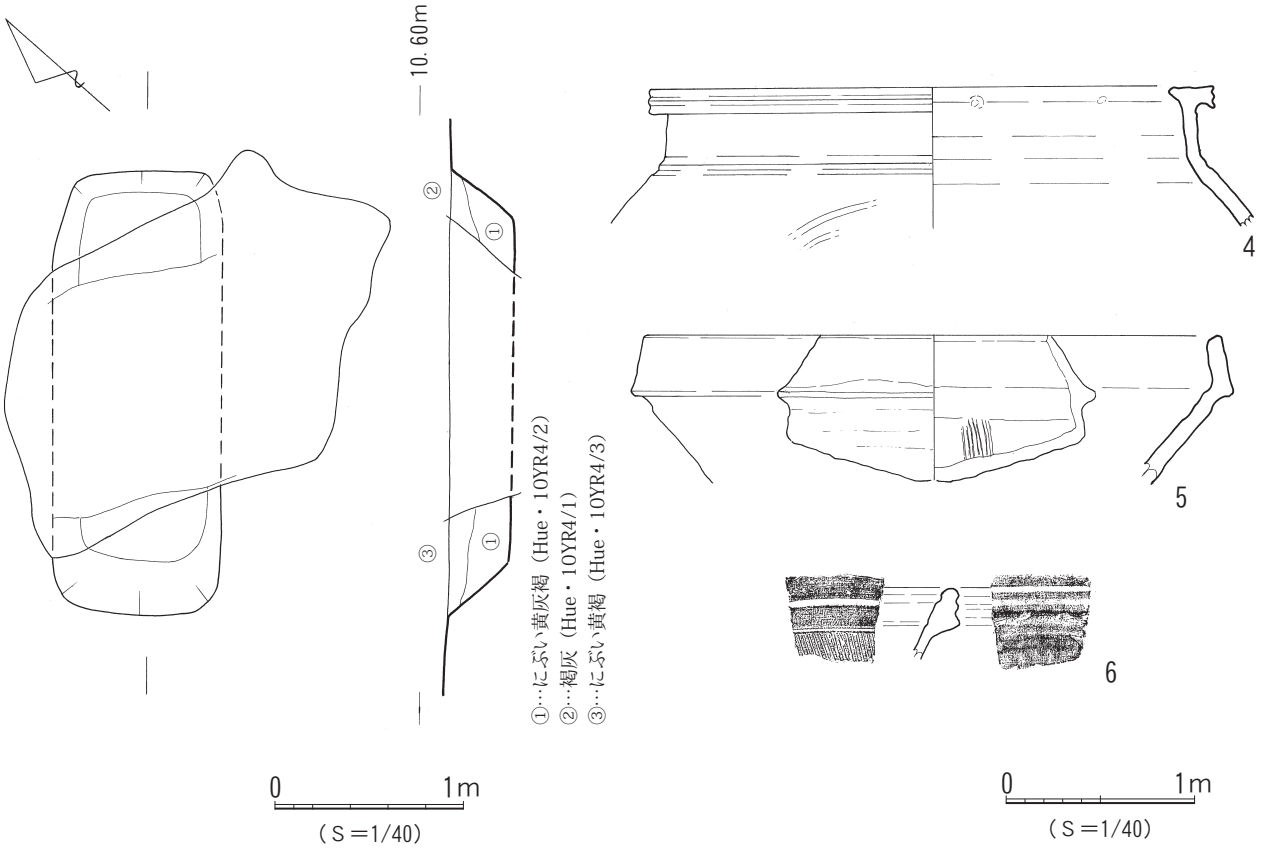
長軸 1.35 ｍ × 短軸 1.25 ｍ、深さは約 95 ㎝。主軸方位は Ｎ－ 8°－Ｅである。一部は攪乱坑掘削による影響を受けている。平面・断面形状から座棺と推定される。図化可能な出土遺物はないが、埋土中にわずかに骨片が認められた。


1
2
3
4
5
A
B
C
D
E
G.N.
X=−116445
X=−116450
X=−116455
X=−116460
Y=37105
Y=37110
Y=37115
Y=37120
SD1
SD2
SD3
SC1
SC2
SC3
SE1
0
5m
(S＝1/150)

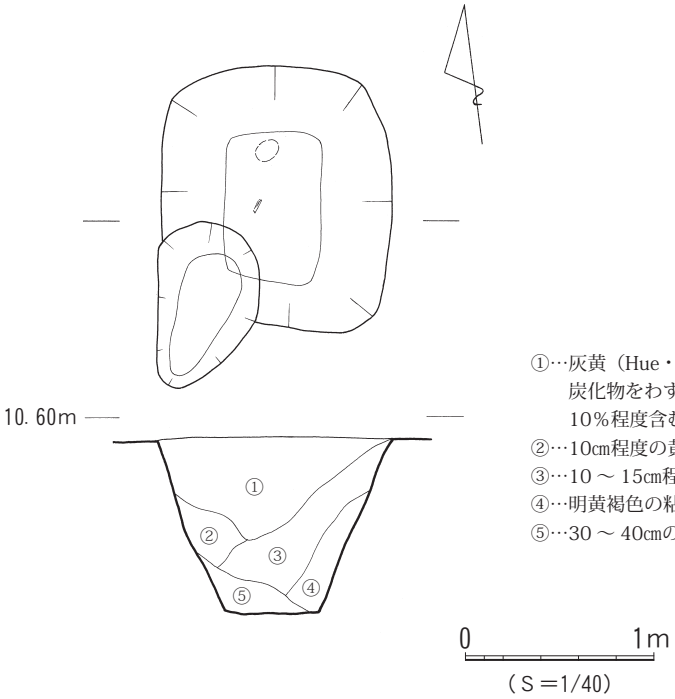
第３図　遺構の分布



第４図　１号土坑墓・１号土坑墓出土遺物



第５図　２号土坑墓・２号土坑墓出土遺物



第６図　３号土坑墓

（３）土　坑

墓壙以外の掘り込みである。３基確認された。うち１基は不整な平面･断面形を呈するものである。

１号土坑（ＳＣ１）［第７図］

長軸 0.85 ｍ×短軸 0.7 ｍのやや不整な楕円形を呈する。深さは約 10 ㎝で床面はほぼ平らとなる。主軸方位は Ｎ－ 17°－Ｅである。埋土はややしまった粗砂で、基盤層由来のブロックを含んでいる。

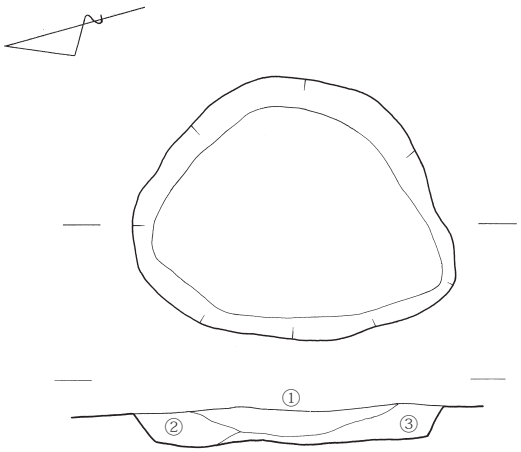
７は瓦質の個体で、鉢形を呈する器物の底部と目される。丸瓦の瓦当部分であった可能性も考えられるが、それにしては調整が粗くつくりも雑である。内面の体部の立ち上がる部分には刻線を入れている。また外底面には脚部が付くものと思われる。

２号土坑（ＳＣ２）［第８図］

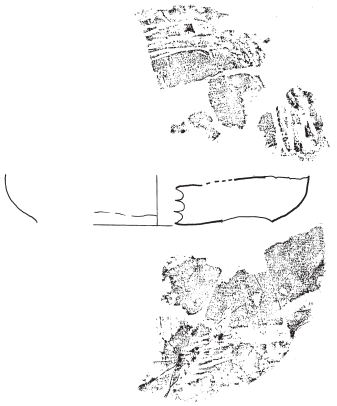
長軸 0.7ｍ ×短軸 0.42 ｍの長楕円形を呈する。深さは約 30 ㎝。主軸方位は Ｎ－ 89°－Ｅであり、ほぼ東西方向を示す。埋土は固くしまった粗砂で、黄褐色粒を含んでいる。図化可能な遺物は出土していない。

３号土坑（ＳＣ３）［第９図］

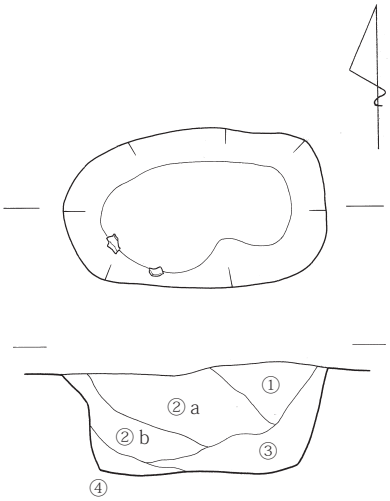
近世の溝（ＳＥ１）に切られる。規模は残存する長軸の長さが 3.9 ｍ、短軸が 2.2 ｍ。検出面から底面までの深さは 35 ㎝程度である。埋土は固くしまった粗砂であり、土師器の胴部片が１点出土したが、遺構の構築時期や性格の比定には至っていない。



①…灰黄褐（Hue・10YR4/2）粗砂
　堅くしまる。黄褐色土ブロック含む
②…灰黄褐（Hue・10YR5/2）①より
　黄褐色土ブロック含有率高い
③…にぶい黄褐（Hue・10YR5/2）しまり弱い
　粗砂



第７図　１号土坑・１号土坑出土遺物



0　1m
（S＝1/40）

①…暗褐（Hue・10YR3/3）堅くしまる。粗砂
②a…灰黄褐（Hue・10YR4/2）粘性あり。粗砂
　５mm程の黄褐色粒が散漫に入る
②b…にぶい黄褐（Hue・10YR4/3）ややほりあり
　粗砂
③…にぶい黄褐（Hue・10YR5/3）粗砂。ガラス質
　分を含む
④…にぶい黄褐（Hue・10YR5/4）ほり弱い。
　粗砂。ガラス質分を多く含む

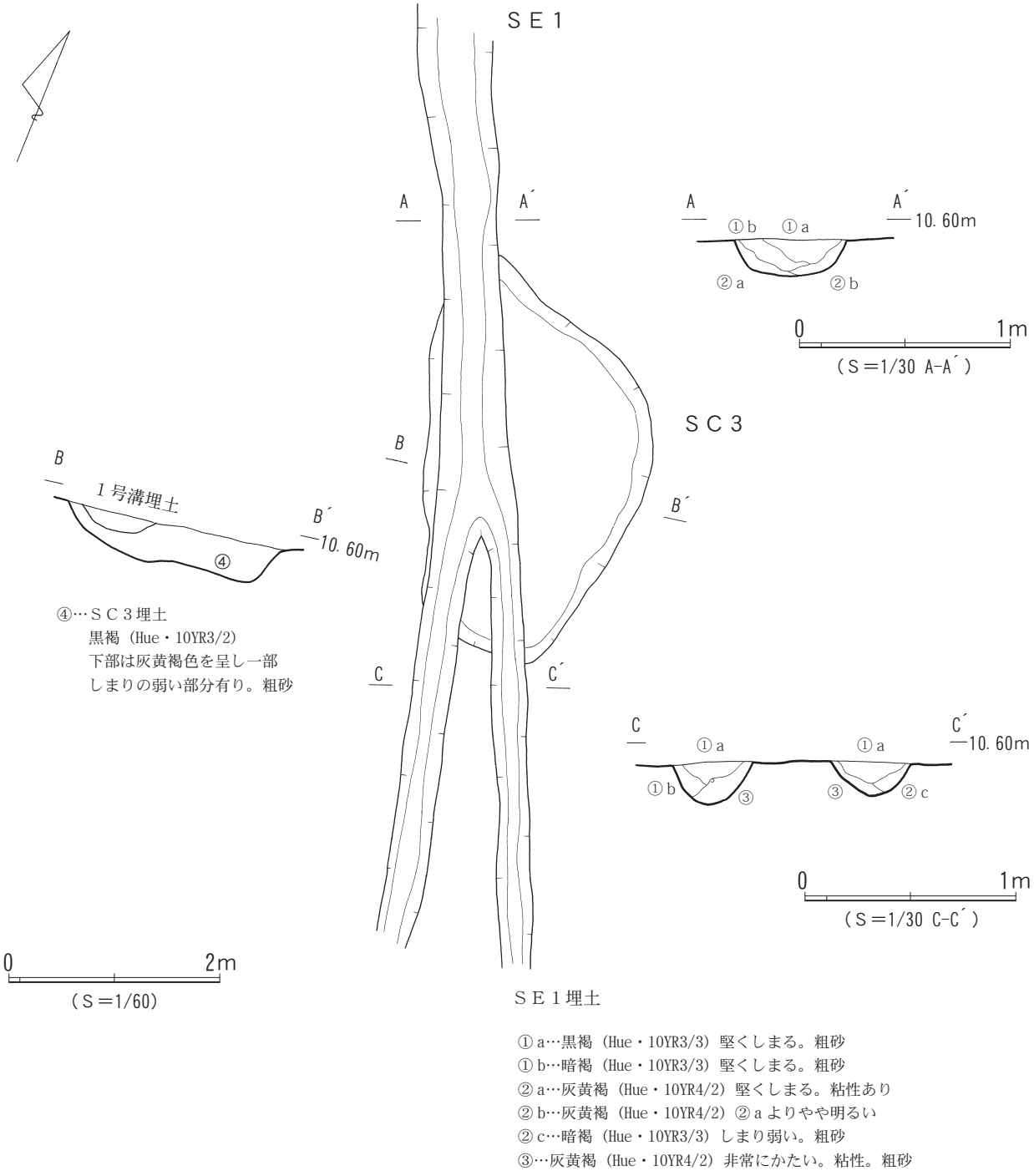
第８図　２号土坑

（４）溝状遺構

１号溝状遺構（ＳＥ１）［第９図］

出土遺物から近世のものと考えられる溝である。検出範囲内における長さは約8.4ｍで、深さは約15～20㎝である。溝の走向軸は　Ｎ－８°－Ｅで、Ｄ４グリッド付近で二又に分岐している。ＳＣ３埋没後に掘削されている。埋土は黒褐色・灰黄褐色を呈する粗砂で、固くしまっている。

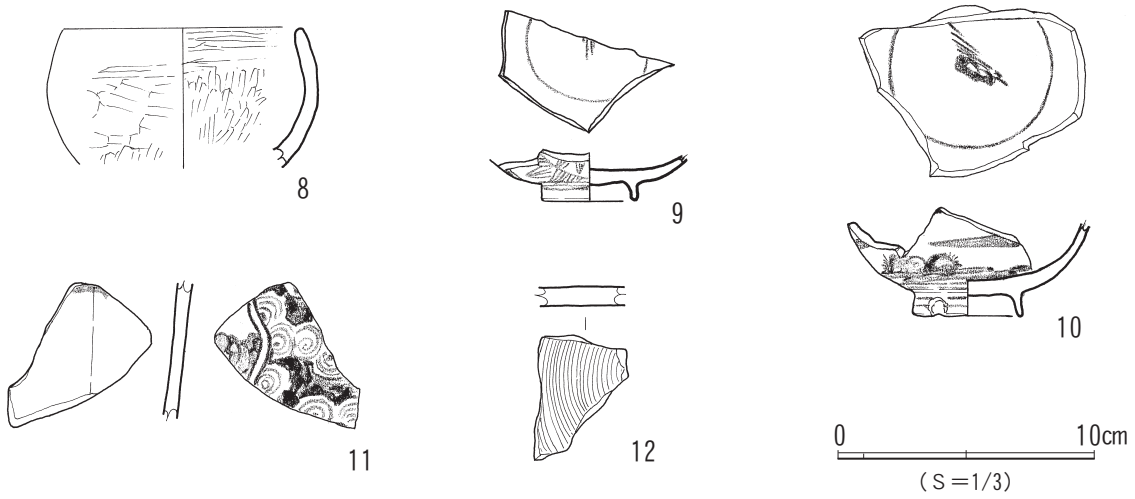
総数５点の遺物が出土している。器面にミガキを施す古墳時代の土師器椀（８）が１点認められるほかは、近世の肥前系磁器と陶器である。９と10は染付碗、11は染付の角鉢であり、屈曲部位にあたる。12は陶器甕の底部であろう。糸切りの痕跡が認められる。



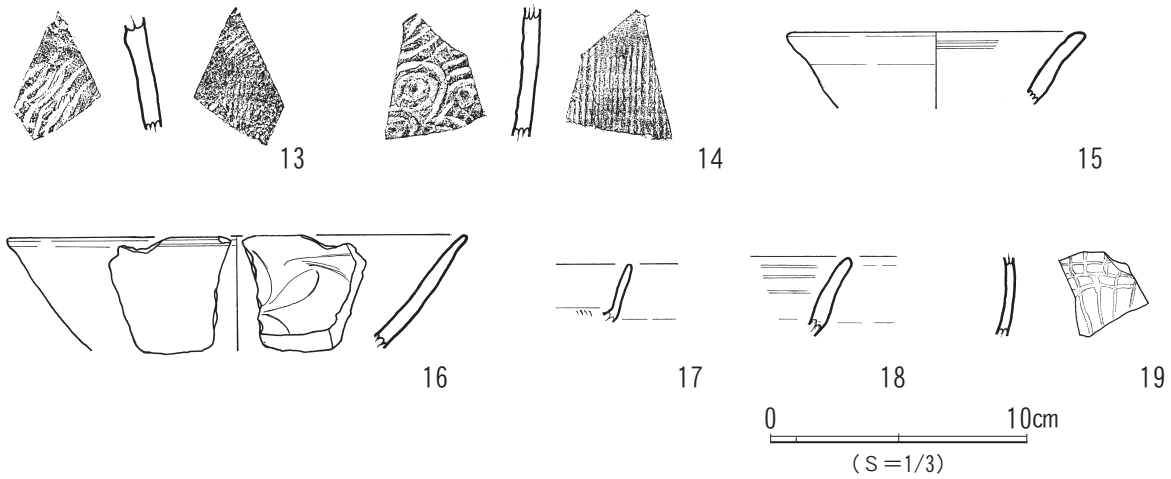
第９図　３号土抗・１号溝状遺構

（５）遺構外出土遺物

本遺跡では明確な遺物包含層はなく、遺構出土以外の遺物は、表土中より土師器、陶磁器が出土している。そのほとんどは近世に属する陶磁器類である。



第 10 図　1 号溝状遺構出土遺物



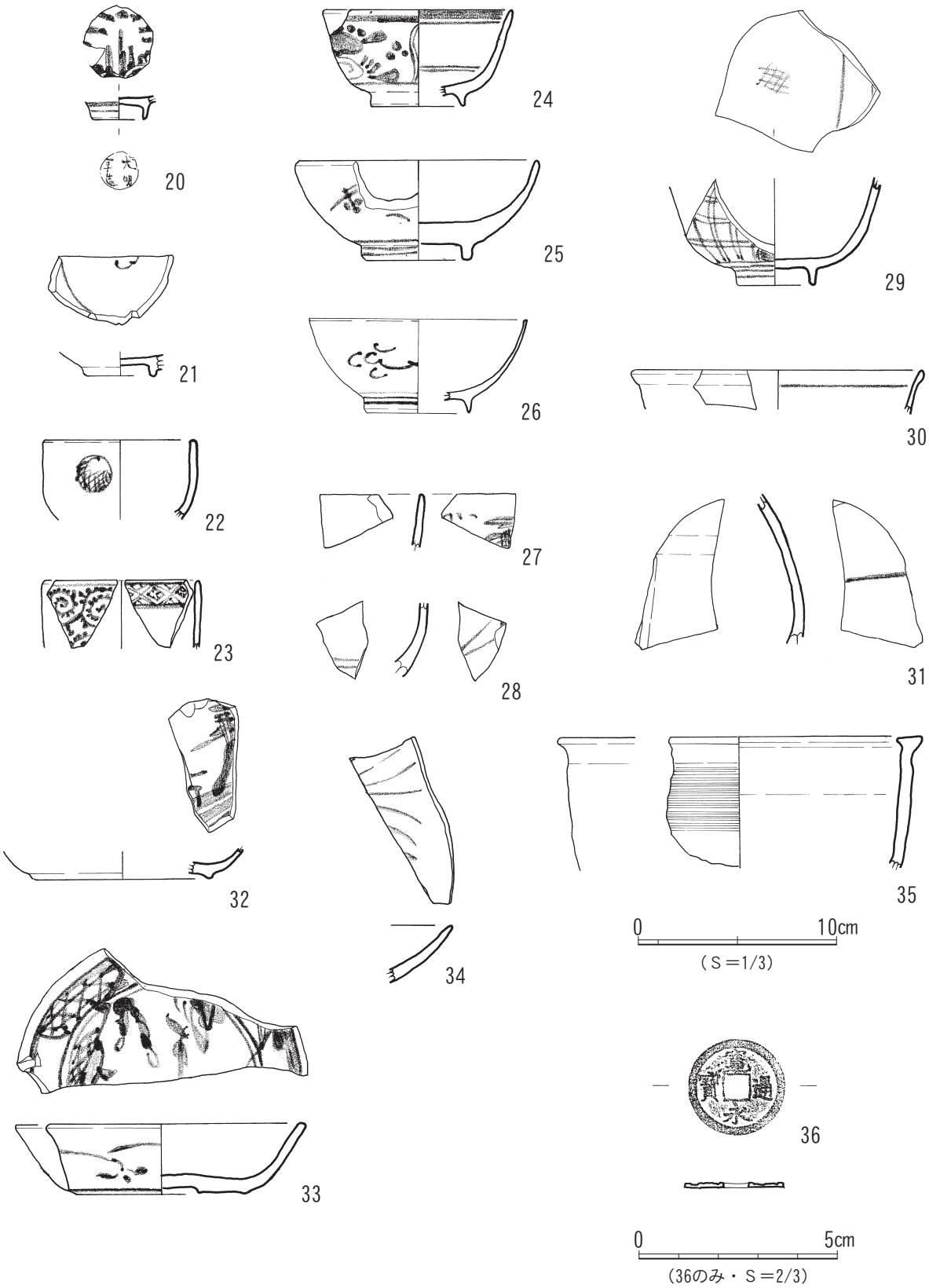
第 11 図　遺構外出土遺物①

13・14 は古墳時代に属する須恵器甕の胴部片である。いずれも小破片である。13 は頸部の近くか。

15 ～ 19 は中世の青磁である。16 は劃花文を施す碗、17 は腰折れの皿、15・18 は輪花皿、19 は線描蓮弁文を施す碗である。15 は焼成不良で発色の悪い個体である。

20 ～ 33 は肥前系磁器である。小杯、碗、皿などの器種が認められる。20 は高台内に「大明年造」の銘がある。なお、34 は産地不明で、他より時期の下るものである可能性が高い。

36 は銭貨（寛永通宝）である。遺構（近世墓）に伴うものである可能性もあるが、断定はできない。



第 12 図　遺構外出土遺物②

第１表　遺物観察表

No.	出土位置・層	種別	器種	手法・調整・文様等の特徴		色　調		胎土中に含まれる粒の特徴	備考
				外面	内面	外面	内面		
1	ＳＤ１	須恵器	鉢	ナデ	回転ナデ	灰	灰	１㎜前後の白色・灰色粒・小礫	東播系
4	ＳＤ２	陶器	甕	回転ナデ	回転ナデ	釉調はオｒ－ブ黒．胎土は橙		１㎜前後の白色粒多量	薩摩系
5	〃	陶器	擂鉢	回転ナデ	回転ナデ	明赤褐	明赤褐	１㎜前後の白色・灰色粒	備前系
6	〃	陶器	擂鉢	回転ナデ	回転ナデ	明赤褐	明赤褐	１㎜以下の白色粒	備前系
7	ＳＣ１	瓦質土器	鉢？	ナデ・刻線	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	１～２㎜前後の赤色粒	
8	ＳＥ１	土師器	椀	ミガキ	ミガキ・ナデ	にぶい橙	橙	１㎜前後の灰色・褐色粒	
9	〃	磁器	碗	素描笹文	見込：不明	釉調は灰白．胎土は白色		微細粒	肥前系
10	〃	磁器	碗	山水文	見込：山水文	釉調は灰白．胎土は白色		微細粒	肥前系
11	〃	磁器	角鉢	－	青海波文	釉調は灰白．胎土は白色		微細粒	肥前系
12	〃	陶器	甕？	糸切り痕？	－	黄褐	灰褐	微細粒	
13	遺構外	須恵器	甕	格子目タタキ	当て具痕	灰	灰	１㎜ｉ以下の白色粒	
14	〃	須恵器	甕	格子目タタキ	同心円状当て具痕	灰	灰	１㎜ｉ以下の白色粒	
15	〃	磁器	皿	－	櫛目文	灰白	灰白	１㎜ｉ以下の灰色粒	青磁・発色不良
16	〃	磁器	碗	－	劃花文	釉調はオリーブ灰．胎土は灰白		精良	龍泉窯系青磁
17	〃	磁器	皿	－	一部櫛目文	釉調はオリーブ灰．胎土は灰白		精良	同安窯系青磁か
18	〃	磁器	椀	－	沈線文	釉調は明緑灰．胎土は灰		精良	龍泉窯系青磁
19	〃	磁器	椀	線描連弁文	－	釉調は緑．胎土は灰白		精良	龍泉窯系青磁
20	〃	磁器	椀	草花文	圏線，「大明年造」銘	釉調は灰白．胎土は白		精良	肥前系
21	〃	磁器	椀	花文	花文	釉調は灰褐．胎土は灰		精良	肥前系
22	〃	磁器	椀	草文	－	釉調は灰．胎土は灰		精良	肥前系
23	〃	磁器	椀	唐草文	四方襷文	釉調は白．胎土は白		精良	肥前系
24	〃	磁器	椀	芙蓉文	圏線	釉調は白．胎土は白		精良	瀬戸・美濃系
25	〃	磁器	椀	草花文・圏線	蛇ノ目釉剥ぎ	釉調は灰白．胎土は白		精良	肥前系
26	〃	磁器	椀	鳥文・圏線	－	釉調は白．胎土は灰白		精良	肥前系
27	〃	磁器	椀	山水文	－	釉調は白．胎土は白		精良	肥前系
28	〃	磁器	椀	山水文	圏線	釉調は白．胎土は灰白		精良	肥前系
29	〃	磁器	椀	格子文	見込：格子文	釉調は青灰白．胎土は灰白		精良	肥前系
30	〃	磁器	椀	－	圏線	釉調は白．胎土は白		精良	肥前系
31	〃	磁器	瓶	圏線	露胎　一部釉垂れ	釉調は緑灰．胎土は灰褐		微細粒	肥前系
32	〃	磁器	皿	底面：高台内露胎	草文	釉調は青白．胎土は灰白		精良	肥前系
33	〃	磁器	皿	草文，蛇の目高台	草文	釉調は白．胎土は白		精良	肥前系
34	〃	磁器	皿	－	草文	釉調は灰白．胎土は灰白		精良	
35	〃	陶器	甕	カキ目	－	オリーブ灰	オリーブ灰	１㎜以下の白色粒	薩摩系

第Ⅲ章　総　括

本遺跡の発掘調査は規模の大きなものではなかったが、いずれも近世に属する土坑墓３基、土坑３基、溝状遺構１条、及びピット 24 基を検出し、近世を中心とする遺物が出土するなど、当地における過去の土地利用状況や、周辺に存在すると想定される集落跡の様相を知るための手掛かりを得ることができた。以下、本遺跡の位置づけを図る上で重要と思われるいくつかの点について記述する。

・近世の遺構と遺物

調査区内で出土した遺物は、ほとんどが近世後期の陶磁器類であり、肥前系磁器が目立つ。それらは当然のことながら一括資料として扱うことはできないが、文様などから 19 世紀前半におさまると考えられる。この点から、３基の土坑墓のおおよその構築時期が推定できる。

１号土坑墓（ＳＤ１）には７枚の銭貨が副葬されており、いわゆる六道銭の事例と位置づけられる。銭種は不明であるが、調査区内より寛永通宝が１枚出土していることや近世後期とする時期的な面からみて寛永通宝である蓋然性が高い。なお、南九州では六道銭として７枚の銭貨を副葬する事例が多いとの指摘があり（櫻木 1991）、関連が注目されるが、本遺構については上面の削平が進んでいることから、本来の枚数であったのかどうか疑問も残る。

ＳＤ２の墓壙埋土中からは陶器片が出土している。うち備前系の擂鉢１点（５）の生産時期は中世後期から近世初頭と考えられ、混入した可能性が高いが、薩摩系甕と備前系擂鉢は、上記の年代観と齟齬はない。

遺構の主軸に着目すると、１号溝状遺構（ＳＥ１）の主軸が１号・２号土坑墓（ＳＤ１・２）のそれとほぼ揃うことから、ＳＥ１は墓地造営に伴う区割りなどの機能を持った施設と目されること、３号土坑墓（ＳＤ３）の主軸がＳＤ１・２のそれとは異なることから、ＳＤ１・２とＳＤ３は時期差を有する可能性が高いことが指摘できる。ＳＤ１・２とＳＤ３とは平面形も断面形も異なる。このことも直截的には時期差を示唆していると考えられる。基本的には寝棺である前者がより新しいものと考えられる。

これらの近世墓に性格については、石塔が確認されていないこと、建物との関連が不明であることから推測の域を出ないが、墓坑が群集しないことから屋敷墓としての性格を想定しておきたい。肥前系磁器が多数を占め、薩摩系の陶器が補完的に存在する出土遺物のセットは(一定の時期幅を含むが)、屋敷・集落において用いられた日用雑器であったと考えられる。当地は幕末においては延岡藩領に属しており、内藤家文書によれば跡江組八カ村の一つと位置づけられ、大庄屋が置かれていた。現在の宮崎市域は各藩領が複雑に入り込んでおり、支配領域を単位として農村の生活の在り方を捉えていく上で、これらの日常雑器の組成が大きな役割を果たすものと期待される。

・古墳時代と中世の遺物

遺構は確認できなかったが、中世については一定量の遺物が出土しており、付近に存在したと推測される集落の位置づけが重要な意味を持つ。特に南側の丘陵端部にあったとされる跡江城を拠点とした勢力との関連が問題となる。跡江城は、建武三年（1336）に土持宣栄が浮田庄跡江方預所の瓜生野八郎左衛門尉の籠る浮田庄政所の城郭を追落したとされる（旧記雑録）。南北朝期までに、浮田庄の中に跡江方という支配単位が成立しており、預所が存在したことがわかる。応永 22 年（1415）には日向に入った島津勢が跡江城に陣を構えた（日向記）。今回出土した青磁の中には 12 ～ 13 世紀代に

位置づけられる初期の龍泉窯系の資料や、15 世紀代の線描蓮弁文を施す資料が含まれており、様相の知られていない跡江城の詳細を知る上で重要な傍証となるのかも知れない。

さらに、ごく少量の出土ではあるが、古墳時代の遺物は、生目古墳群の造墓集団との関連という脈絡で位置づけていくべきものと考えられる。

【参考文献】

池崎譲二　2001　「博多遺跡群祇園駅出入口 1 号土坑－竜泉窯・同安窯系青磁」『季刊考古学』75　雄山閣

上田秀夫　1982　「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』 2　貿易陶磁研究会

岡山市教育委員会　2002　『岡山城三之曲輪跡』（表町一丁目地区市街地再開発ビル建設に伴う発掘調査）

九州近世陶磁学会編　2000『九州陶磁の編年 －九州近世陶磁学会 10 周年記念－』

櫻木晋一　1991　「九州地域のおける中・近世の銭貨流通について」『九州文化史研究所紀要』 36

宮崎県埋蔵文化財センター　2000 『上の原第 2 遺跡・上の原第 1 遺跡ほか』（宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 25）

宮崎県埋蔵文化財センター　2002 『柿迫遺跡・龍泉寺遺跡』（宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 54）

宮崎県埋蔵文化財センター　2006 『別府町遺跡』（宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 137）

宮崎県埋蔵文化財センター　2009 『旭 2 丁目遺跡』（宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 183）

※中世の跡江・跡江城跡に関する略史と近世における帰属については『宮崎県の地名』(平凡社 1997) より引用している。

図版１

遺跡全景

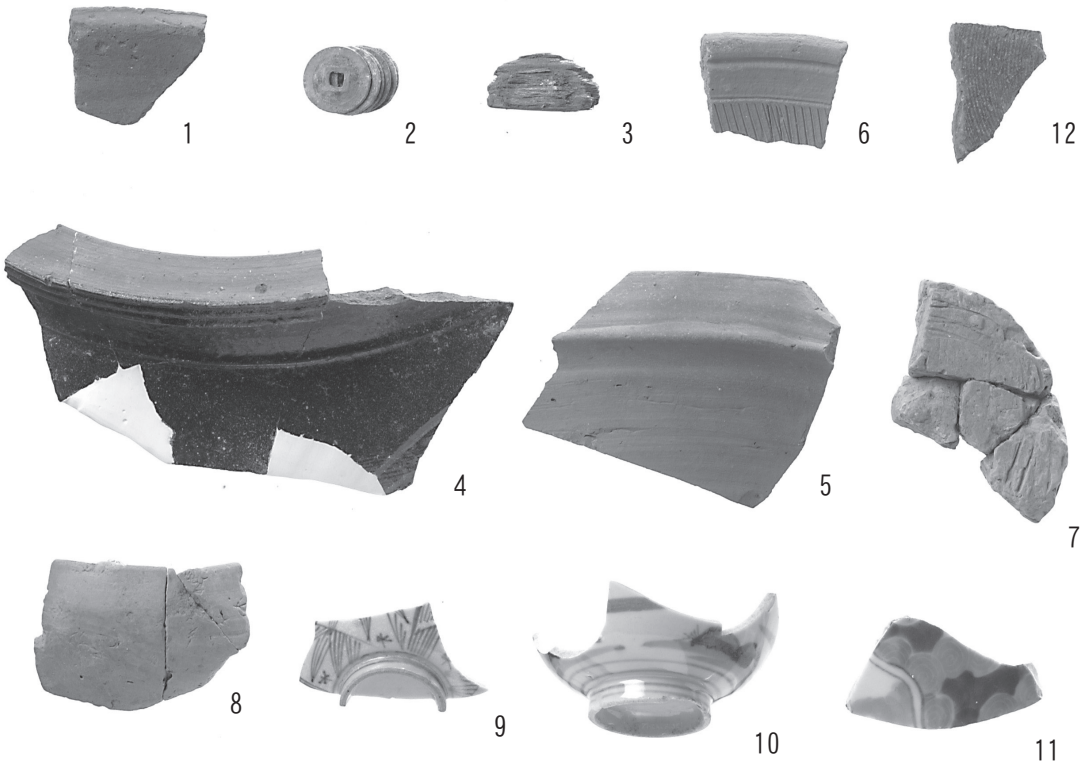
調査区近景

ＳＤ１・ＳＤ２

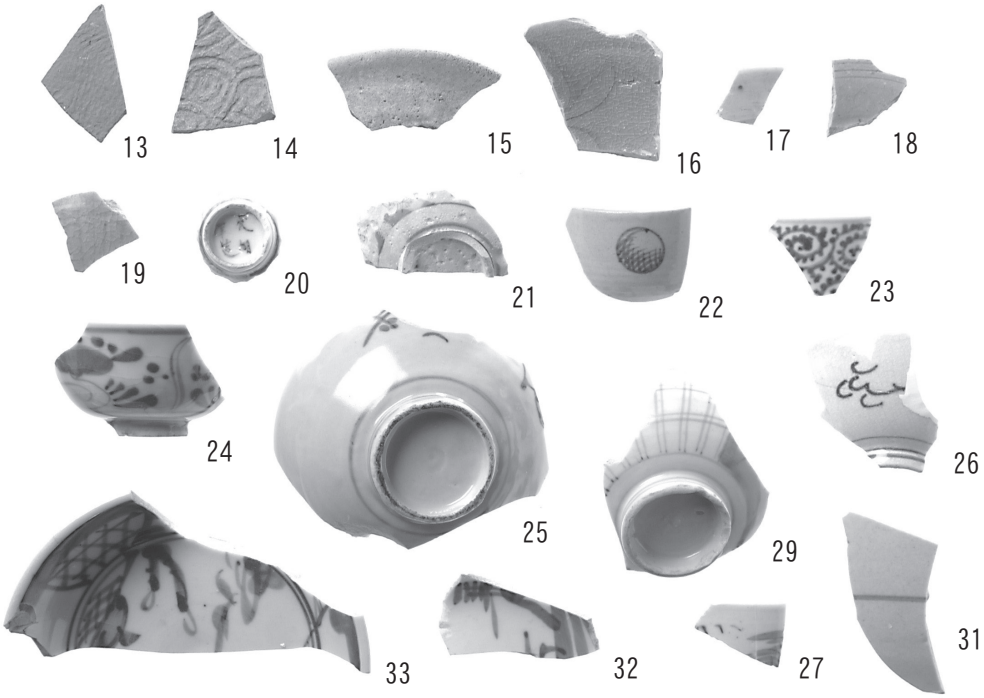
ＳＤ３

ＳＥ１・ＳＣ３

図版２



出土遺物①



出土遺物②

報告書抄録

ふりがな	あとえさかのしたいせき
書名	跡江坂ノ下遺跡
副書名	主要地方道宮崎西環状線（松橋工区）地域活力基盤創造交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第２０３集
編著者名	吉本正典
編集機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒880-0212　宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地　　TEL　0985-36-1171
発行年月日	２０１１年3月２５日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘 期間	発掘 面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あとえさかのした 跡江坂ノ下 いせき 遺跡	みやざきけん 宮崎県 みやざきし 宮崎市 おおあざあとえ 大字跡江 706 番付近	45205		31°　56’50”	131°　23’40”	2010. 2. 22 ～ 2010. 3. 23	380 ㎡	主要地方道宮崎西環状線（松橋工区）地域活力基盤創造交付金事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
あとえさかのした 跡江坂ノ下 いせき 遺跡	集落 散布地	中世 近世	土坑墓３基　土坑３基 溝状遺構１条	青磁・染付 陶器・銭貨	

要約	近世の土坑墓３基、土坑３基、溝状遺構１条などの遺構を検出した。墓坑中から陶磁器や銭貨などが出土している。また遺構外より中世・近世陶磁器が出土した。

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第２０３集

あとえさかのした
跡江坂ノ下遺跡

主要地方道宮崎西環状線（松橋工区）地域活力基盤創造交付金事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１１年3月２５日

編集・発行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212　宮崎市佐土原町下那珂４０１９番地
印　刷　有限会社いろは企画
〒889-1603　宮崎市清武町正手３丁目１９－２